

日本人の宗教意識と社会的実践¹⁾

—特に浄土真宗の門信徒を中心に—

口 羽 益 生・*舟 橋 和 夫

(*龍谷大学)

日本人の宗教意識や宗教行動は、一般に無自覚的、年中行事的、人生儀礼的、共同体的であるといわれている。社会的貢献の意識が弱く、社会改良のモデルが宗教の中に見られないとも言われている。

本論においては、浄土真宗門信徒の宗教行動と宗教意識を浄土真宗本願寺派宗勢基本調査実施センターによる1996年度の全国末寺寺院の実態調査（「第7回宗勢基本調査」）の資料を詳細に統計的手法を用いて分析することにより、宗教意識のレベルが高いほど、社会的実践（社会の福利厚生や社会改良に資する行為）の傾向が門徒に強くみられるが、これは大乘仏教の利他主義的菩薩の精神が実践のモデルになっていることによると論じている。

キーワード：日本人の宗教意識、社会的実践、浄土真宗門徒

1. はじめに

日本の宗教と伝統的な価値観を宗教社会学的に分析したR. N. ベラーは、その著書『徳川時代の宗教』（原著1957年刊）の最後の部分で、次のように述べている。

「どの宗教も、世俗を超越する真理を明示しようとするが、しかし、超越しようとするまさにその世俗に自らおちいるのである。どの宗教も、世俗をそれ固有の像に造りかえようとするが、しかし、常にある程度、逆に世俗の像に造りかえられてしまうのである。これが宗教の悲劇である。宗教は人間を超越しようとするが、しかし、宗教は人間的、あまりにも人間的なのである。けれども、……宗教が、究極的価値の本源にかかわり続けるかぎり、いいかえれば、宗教が宗教でありつづけるかぎり、宗教と社会の対決はつづくのである。宗教は、そのような選択をしながら、どんな人間の敗北をも勝利へと転化させるのである。」²⁾

つまり、機能的にみれば、日本の仏教は基本的に過去に問題を抱えていたといえるが、宗教の立場から言えば、宗教の超時代的真実の継続性と再生は、あり得るというのである。

この書物におけるベラーの研究は、日本の経済的近代化が、日本の伝統的価値体系によって支えられたことを明快に論じた点において優れている。しかし、その宗教の見方は甘いと批判したのは丸山真男である。日本の前近代的諸価値（それは日本の伝統的宗教に支えられたものであるが）は、日本の経済的近代化に寄与したとしても、それは必ずしも社会の近代化をもたらすものではない。彼は、ベラーの考える、上記のような普遍主義的宗教の超時代性についての「楽天主義的」解釈に疑問を投げかけたのである。

このような批判に応えるためか、ベラーは、歴史を超えた仏教の根本的経験の自覚と再生の間

題を確認するため、鎌倉仏教（彼は特に親鸞と道元の思想に注目するが）、その現世否定の論理、たとえば「世間虚仮、唯仏是真」（聖徳太子）の考え方や、新しい宗教形態の創造、たとえば、浄土真宗の称名念仏中心の「非僧非俗」・「御同朋御同行」教団の形成について考察する。

ベラーによれば、浄土真宗は「世間は本質的に無価値であるとするが、新しい方法においてそれを回復」しようとする。浄土真宗の信徒であった小林一茶は、それを「人の世に 田に作らるゝ 蓮の花」、「ともかくも あなた任せの としの暮」のように比喩的に俳句で表現するように。しかし、鎌倉仏教は、「宗教的には、革新的であったが、社会的にはそうでなかった。」「新しい社会秩序の実現という展望もなかった。新しい教団（御同朋教団）は封建秩序への挑戦には失敗した」のである。

彼は「この問題は仏教のみならず、キリスト教の新約聖書にも、仏教經典にも、社会秩序の青写真がないことによる」とも言い、「しかし、私は確信している。仏教が現代日本やアメリカや世界の諸問題に対する絶対的な答えである。現代には、道徳的、科学的知性も必要であるが、宗教的洞察力も必要である」からだという。³⁾

ベラーは、「宗教的洞察力」とは何か、「宗教が、究極的価値にかかわり続ける限り、・・・人間の敗北を勝利に転化させる」とはどういう事か、明確には示していない。このことを念頭におきながら、本論においては、日本人の宗教意識と社会的実践についての関連性について、浄土真宗門信徒の調査資料の分析から解明し、現代に必要な宗教的洞察力について考えてみたい。

2. 日本人の宗教行動と宗教意識

(1) 日本人の宗教意識と宗教行動の特徴

NHKは1975年から5年ごとに16歳以上の男女サンプル約4千人前後を対象にして日本人の意識構造を調査している⁴⁾。その宗教信仰の有無の調査結果によると、〈仏〉を信じている人の比率は39%～45%あり、〈神〉を信仰している人は32%～39%ある。何も信じていない人は、23%～30%の間である⁵⁾。調査年によって、その比率はこれらの数値の間で上下しているが、年齢階層別に違いがあるものの、全体として神か仏を信じている人の比率は下降気味で、何も信じていない人の比率は上昇傾向にある。

NHKが1981年に16歳以上の男女有効サンプル2692人に宗教意識を中心に行った調査では、信仰を持つ人は33%、信仰を持っていない人は65%であった。その調査年度に最も近い1979年度でのアメリカでの信仰を持っている人の比率は93%、持っていない人は7%である⁶⁾。

また口羽は1994～95年の間にマレーシア・ケダ州のPL村、東北タイのDD村、滋賀県湖東のGK村で、20歳以上の性別・年齢階層別に、村内の5カ所から約100名前後のサンプルを選んで宗教信仰の有無を尋ねた調査を行った。その結果、信仰のある人は、マレーシアでは、100名中100%。東北タイでは78名中98.7%、滋賀県では51.6%（信仰のない人は41.9%、回答できない人は6.5%）であった。このうち、滋賀県の調査地はかなり宗教心の篤い地域とされているが、それでも51.6%である⁷⁾。

このように自覚的に信仰を持っている人が日本人の間では、大体50%以下であるが、初詣や墓参りを行う人の比率は一般に高く、1981年のNHK調査では、81%と89%である⁸⁾。

第一生命経済研究所が2002年9月に40～60歳代の男女900人を対象に、子供時代に行った宗教行動の中で、現在も行っているものの調査をした。仏壇や神棚に手を合わせたり、お供えをす

る割合は75%から43%に減少している。しかし、初詣はともに60%、墓参りは78%から64%に減少。家庭内の儀式的習慣は薄れているが、年中行事的な活動は続いているという⁹⁾。

このように見てくると、よく一般に言われているように、日本人の宗教意識と宗教行動の特徴は、無自覚的、慣習的（年中行事的、人生儀礼的）、氏神祭りのように共同体的であるといえる。この点について、浄土真宗の門信徒（以下、門徒と略記する）の調査結果を中心にもっと詳細に見てみよう。

（2） 浄土真宗門徒の宗教行動と宗教意識

NHKの1973年以降の5年ごとの調査では、日本人の日常的宗教行動の調査も行っている。われわれは、1983年と1996年に浄土真宗本願寺派の全末寺寺院と門信徒の実態調査（同派内では宗勢基本調査と呼ばれているものの第5回目と第7回目の調査）の委託を受けて、前者では、全国の末寺寺院10,481カ寺20%の門徒代表（有効サンプル1407、回収率69.9%）と後者では、全末寺寺院10,314カ寺の男女各1名の門徒代表（有効サンプル男性5061、女性5044、回収率50.6%）を対象に同様の調査を行った¹⁰⁾。

この調査では、各サンプルに次の項目について、平素行っているものに丸印をつけてもらっている。宗勢基本調査では、NHKの場合より項目数を増やしているが、項目番号の後に*印が着いているものが、NHKの調査項目である。調査項目の文章表現は、浄土真宗の場合には使用しないものもあるが、NHKの調査や他の調査と比較するために、NHKの調査項目の文言を大体そのまま使用している。

1. *墓参りをしている
2. *この1～2年の間におみくじを引いたり、易や占いをしてもらったことがある
3. 祖先や亡くなった肉親の霊をまつる
4. 仏壇にお花やお仏飯をそなえる
5. 神棚にお花や水をそなえる
6. 決まった日に神社やお地蔵さんなどにお参りに行く
7. *おりにふれ、おつとめをしている
8. *聖典や教典など、宗教関係の本をおりにふれ読む
9. 宗教に関する新聞やパンフレットを読む
10. 信仰グループに参加している
11. 奉仕グループに参加している
12. *この1～2年の間に身の安全や商売繁盛、安産、入試合格などを祈願しに行ったことがある
13. *お守りやお札など縁起ものを自分の身のまわりにおいている
14. *ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行いをしている
15. *宗教とか信仰とかに関係していると思われることは何も行っていない

この問いに対するNHKの調査結果が図1である。浄土真宗の門徒の日常的宗教行動の調査結果は表1の通りである。

NHKの調査結果では、生活習慣のお墓参りが多く、6～7割もあり、次いで〈お守り・お札〉〈祈願〉〈おみくじ・占い〉と言った現世利益的ものが2～3割で、〈お祈り〉〈礼拝・布教〉〈聖典・経典〉の儀礼的、自己修養的なものは1割台である。

浄土真宗の門徒の場合は、1996年の調査では、男性は74.2%が門徒総代であり、他の役職者を

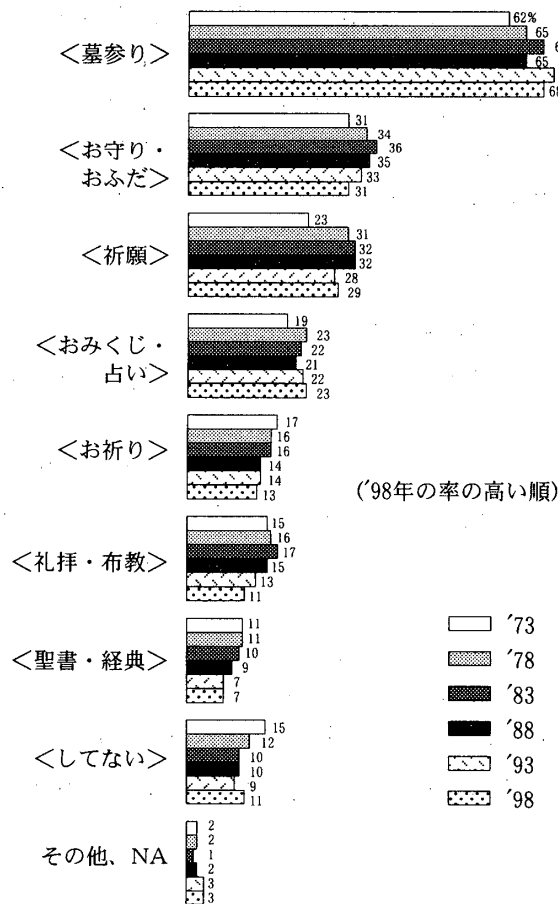


図1. おこなっている宗教的行動(国民全体)

出典：NHK放送文化研究所編「現代日本人の意識構造」
日本放送出版協会，2000，138頁

含めると、役職者が93.1%となる。女性の場合は、58.4%が仏教婦人会の役員で、これも総代、世話方などを含めると、役職者が72.6%となる。高齢者が多く、男性門徒の平均年齢は68歳、女性門徒平均年齢は63歳である。大体末寺寺院の門徒代表格の人が多い。

したがって、NHKの場合と比べると、〈仏壇にお供え〉〈お墓参り〉が8～9割を占め、次いで〈おつとめ〉〈聖典・宗教書を読む〉〈宗教新聞を読む〉〈神棚にお供え〉〈祖先〉〈礼拝・布教〉の儀礼的、自己修養的なものが2～5割台である。〈奉仕グループに参加〉〈信仰グループに参加〉〈祈願〉が1割台で、〈神社・地蔵参り〉〈易・占い〉が1割弱、〈何もしない〉が一番少ない。

門徒の日常的宗教行動のこの資料を、林知己夫の考案した「数量化理論第3類」の統計法で解析した結果が、図2の「門徒の日常的宗教行動のパターン」である。縦軸に彼岸志向・此岸志向をとり、横軸にモノ志向・こころ志向を取ると、右下の象限は〈こころ・此岸志向〉、右上は〈こころ・彼岸志向〉、左下は、〈モノ・此岸志向〉、左上は〈モノ・彼岸志向〉となる。それぞれの象限において接近しているそれぞれの行動は、関連性が深いというのである。たとえば、信仰グループに参加している人は、奉仕グループにも参加し、礼拝布教もする傾向がある。易・占いをする人は、祈願もし、お守り・お札を持ち、神社・地蔵に決まった日にお参りする傾向がある。聖典・宗教書を読む人は、おつとめをし、仏壇の供え物をし、お墓参りもするというように。

この資料に基づき、同じような宗教行動をする人をクラスター分析法によって、類型化すると、

表1. 門徒の日常的宗教行動

項 目	第7回			第5回
	男性門徒 (%)	女性門徒 (%)	小 計 (%)	門徒代表 (%)
墓参りをする	80.1	83.2	81.7	93.7
易・占いをする	6.7	8.8	7.8	6.8
祖先の霊をまつる	30.3	26.5	28.4	39.2
仏壇にお供えをする	87.6	96.5	92.0	90.4
神棚にお供えをする	39.6	40.4	40.0	43.7
神社・地蔵参り	11.7	9.5	10.6	12.5
おつとめをする	47.1	52.3	50.2	49.7
聖典・宗教書を読む	55.7	54.8	55.2	58.0
宗教新聞を読む	38.5	37.9	38.2	38.2
信仰グループに参加する	13.6	13.4	13.5	20.9
奉仕グループに参加する	13.7	21.6	17.6	13.5
祈願をする	15.9	14.8	15.3	13.7
お守り・お札をすもつ	15.8	16.0	15.9	17.0
礼拝・布教をする	26.3	26.7	26.5	39.5
何も行っていない	3.4	4.0	3.7	2.2

出典：第7回宗勢基本調査実施センター編「第7回宗勢基本調査報告」『宗報』，9月号，55頁，1997.

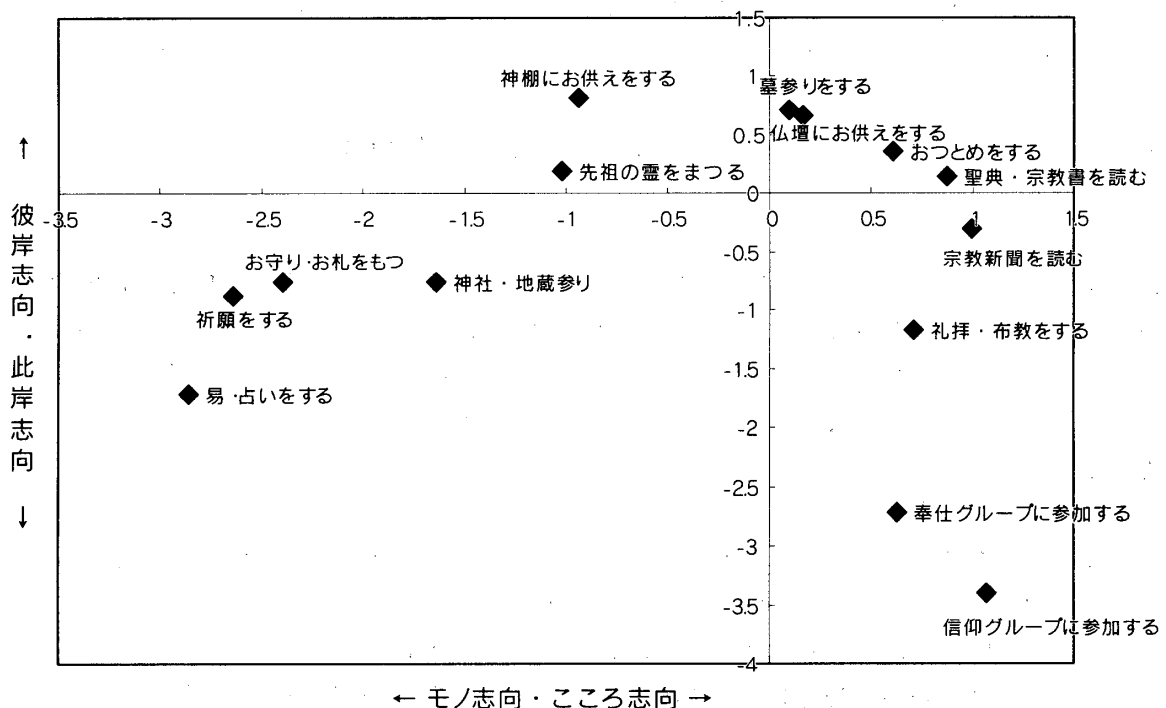


図2. 門徒の日常的宗教行動のパターン

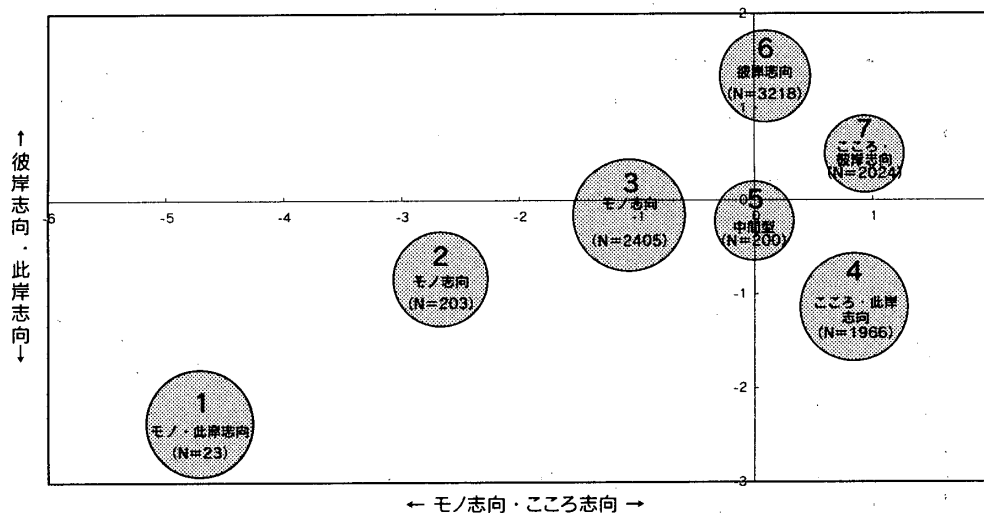


図3. 門徒の7つの宗教行動類型

図3の「門徒の7つの宗教行動類型」がえられる。つまり、この図は同じような行動を取る人のグループ分けをしたモノである。各円の大きさは、それぞれのグループの行動選択範囲の大小を示している。Nはサンプル数である。図2と対比して見ると分かりやすいが、4のグループ〈ココロ・此岸志向〉はかなり自己修養的で、しかも実践的である。7の〈ココロ・彼岸志向〉のグループは、自己修養的であるが、儀礼に熱心である。6の〈彼岸志向〉は彼岸志向が強い。1・2・3のグループはモノ志向性が強く、やや現世利益的である。5は中間型である。

このような日常的な宗教行動をとる門徒の宗教意識は、どのようなものであろうか。各末寺寺院の代表格的な門徒を調査対象にしているとはいえ、その宗教行動を見ても、かなり現世利益的な行動をとる人も少なくない。

上記の第7回の宗勢基本調査において、宗教意識調査の質問項目として用いたのは、次のような内容である。

問A 次の1～15の項目はある人の意見です。これらの意見について、あなたは賛成ですか、反対ですか。あなたの意見にもっとも近いものをそれぞれ1つ選んでください。あまり深く考えないで、直感的に第1印象でお答えください。この回答の選択肢は、1. 全く賛成、2. やや賛成、3. どちらともいえない、4. やや反対、5. 全く反対の5つである。

- ① 私はお寺に行くのが楽しい。
- ② 私には死後の世界があるように思える。
- ③ 真宗の信仰によって、死に直面してもやすらぎの気持ちを持つことができるように思う。
- ④ 先祖供養をしない人は、信仰のない証拠である。
- ⑤ 真に宗教的な人は、日常生活すべての面で道徳的に立派であるべきだ。
- ⑥ 氏神の祭は地域の連帯を高めるために必要だから、ある程度協力すべきだ。
- ⑦ 日本人特有の祖先崇拝は美しい風習だと思う。
- ⑧ 仏教はキリスト教よりすぐれた宗教である。
- ⑨ 靖国神社へ首相が公式参拝するのは当然である。
- ⑩ 信仰は、ほんとうの自分の姿を知る鏡である。

- ⑪ 水子供養はするべきである。
- ⑫ 結婚相手は同じ宗教を信仰する人の中から選ぶべきである。
- ⑬ 「家」や家の墓は大切にすべきである。
- ⑭ 浄土真宗に帰依することによって、人生に明るい目標が与えられる。
- ⑮ 全体としてみて、わが教団はよい教団だと思う。

問B あなたは、次のような質問についてどう思われますか。あなたの意見や立場に近いものを、それぞれ1つ選んでください。(それぞれひとつに○印)

- ① あなたは、お念仏をとこなえているとき、み仏に抱かれているという実感を味わうことがありますか。(1. いつもある, 2. しばしばある, 3. ときどきある, 4. あまりない, 5. 全くない)。
- ② あなたは、1週間のうち、聖典や宗教的書物をどれくらい読みますか。(1. 5時間以上, 2. 3～5時間, 3. 1～3時間, 4. 1時間未満, 5. めったに読まない)。
- ③ あなたは、昔からのしきたりや年中行事を喜んで行うほうですか、それとも抵抗を感じるほうですか。(1. 喜んで行う, 2. どちらともいえない, 3. 抵抗を感じる)。
- ④ あなたは、神社の境内などで心がおちついたり、あらたまった気持ちになったりすることがありますか。(1. ある, 2. わからない, 3. ない)。
- ⑤ あなたに子供がない時、たとえ他人の子供でも養子にもらって、家を継がせたほうがよいと思いますか、それとも継がせる必要はないと思いますか。(1. 継がせる, 2. 状況による, 3. 継がせない)。

これらの問いに対する回答を因子分析法でパターン化すると、図4のような「門徒の宗教意識パターン」がえられる。つまり、相関性の強い意識が近接するのである。〈靖国神社への首相の参拝に賛成〉は〈氏神祭りへの協力〉〈水子供養に賛成〉〈神社の境内で気持ちが落ち着く〉に相関する。また〈祖先崇拝〉〈イエ意識〉〈先祖供養〉〈人格者〉〈慣習尊重〉〈イエの継承〉などは互いに相関し、

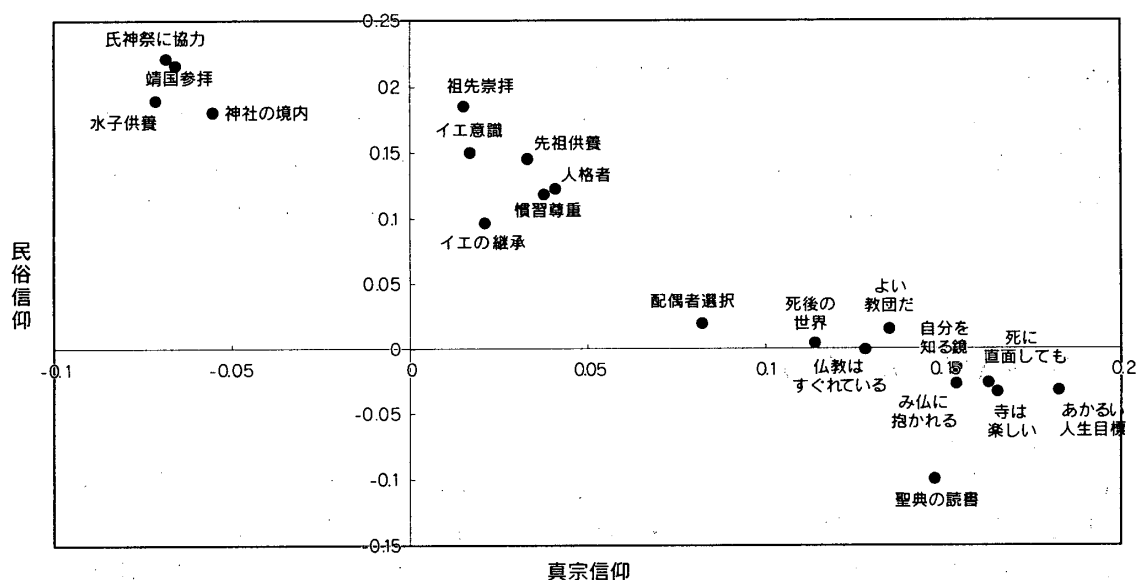


図4. 門徒の宗教意識パターン

右下の〈死後の世界〉〈仏教は優れている〉〈信仰は自分を知る鏡〉〈死に直面しても〉〈御仏に抱かれる〉〈寺は楽しい〉〈明るい人生目標〉なども互いに相関している。

これらの内容を見てみると、右下へ行くほど、真宗の信仰からすれば、望ましい宗教意識であり、左上へ行くほど民俗宗教的意識に近い。それゆえ右下の意識の類型を〈真宗信仰〉的意識、左上へ行くほど〈民俗宗教〉的意識と名づけることにする。

上記の図3において、門徒の宗教行動の特徴から門徒を7つのグループに類型化した。その7種類の門徒の宗教意識について、図4に基づく各人の因子得点の男女別平均値から、どの程度〈真宗信仰〉的意識に傾斜するのを見たのが、図5の「男性・女性門徒の7宗教行動類型と宗教意識」である。これによれば、男女門徒とも4の〈こころ・此岸志向〉と7の〈こころ・彼岸志向〉のグループが〈真宗信仰〉的意識の持ち主であり、5の〈中間型〉も〈真宗信仰〉的意識がやや強い。これに対し1・2・3の〈モノ志向〉の強い行動類型グループは、〈真宗信仰〉的意識が弱い。6の〈彼岸志向〉の強い行動を取るグループの意識も非〈真宗信仰〉的である。

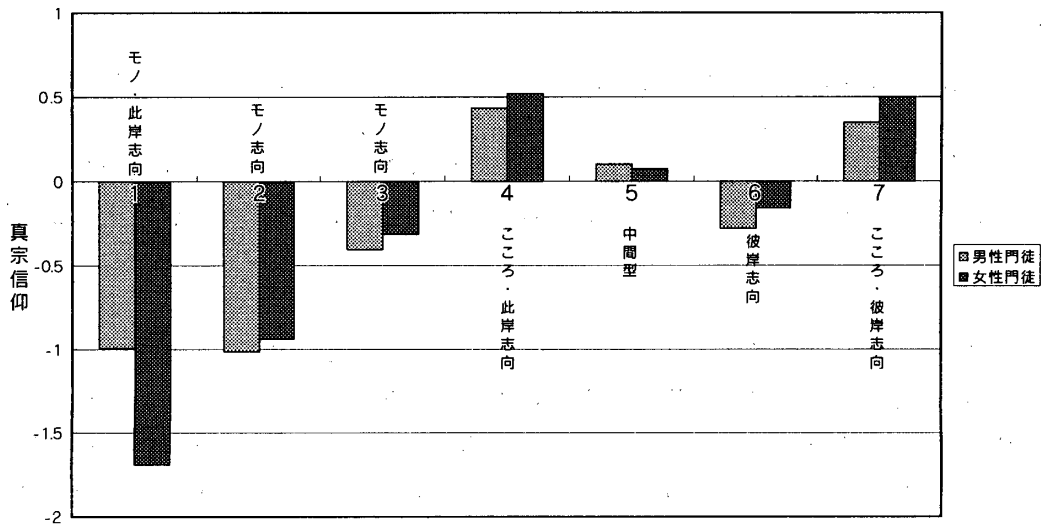


図5. 男性・女性門徒の7宗教行動類型と宗教意識(真宗信仰)

これから見ると4・7・5の宗教行動類型のグループの意識は、非常に自覚的である。図2に示されたこれらのグループの百分率を見ると約40%の門徒の宗教意識は自覚的で、宗教行動も儀礼的、自己修養的、実践的である。しかし、この比率は門徒の代表的な人たちの比率であるから、年齢別により一般の門信徒を対象にしてみれば、その比率はもう少し低下するように考えられる。

3. 自覚的宗教意識と社会的実践

(1) 入信のきっかけと信仰の深化に影響を与えた人

理論的には、宗教の信仰に関心をもつきっかけは、人生の限界状況や精神的な壁にぶつかることによると一般には理解されている。常識、科学や思想などの文化的、知的な手段によっても知的に納得できず、情緒的に耐えられず、倫理的、因果応報的に理解できないような出来事に遭遇するような状況が、宗教信仰に関心をもつきっかけとなると言われている。マックス・ウェーバ

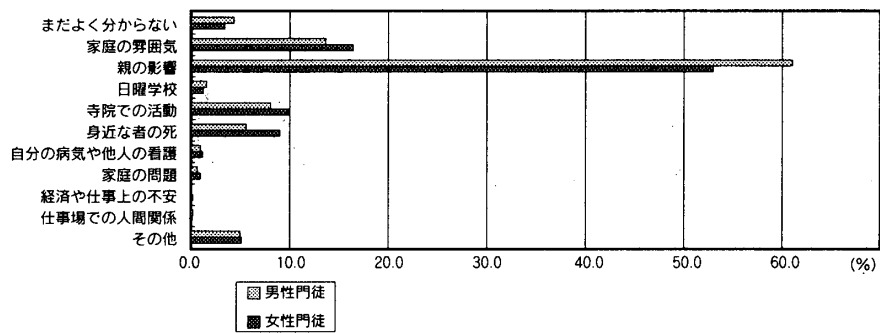


図6. 真宗信仰に関心を持つに至ったきっかけ(男性門徒, 女性門徒)

出典: 第7回宗勢基本調査実施センター編「第7回宗勢基本調査報告」『宗報』, 9月号, 71頁, 1997.

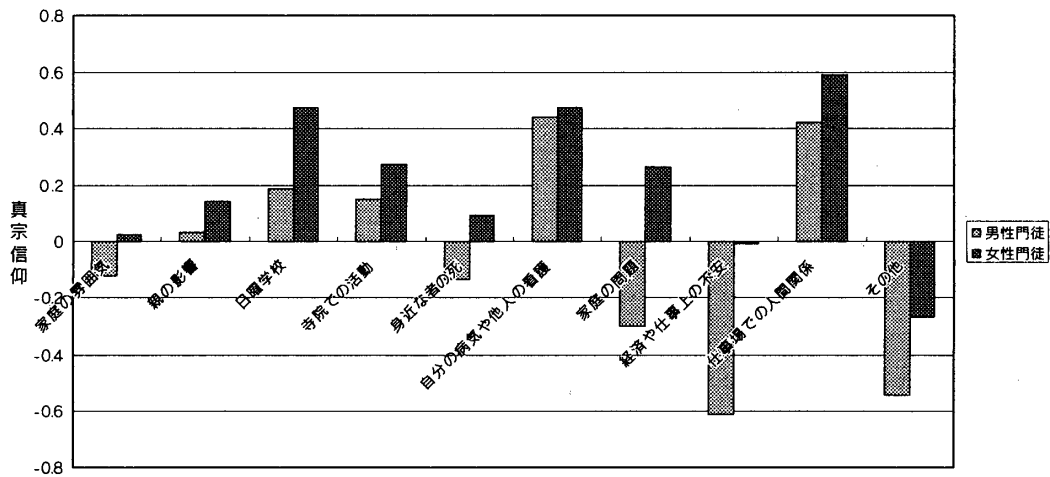


図7. 真宗信仰に関心を持つに至ったきっかけと宗教意識(男性門徒, 女性門徒)

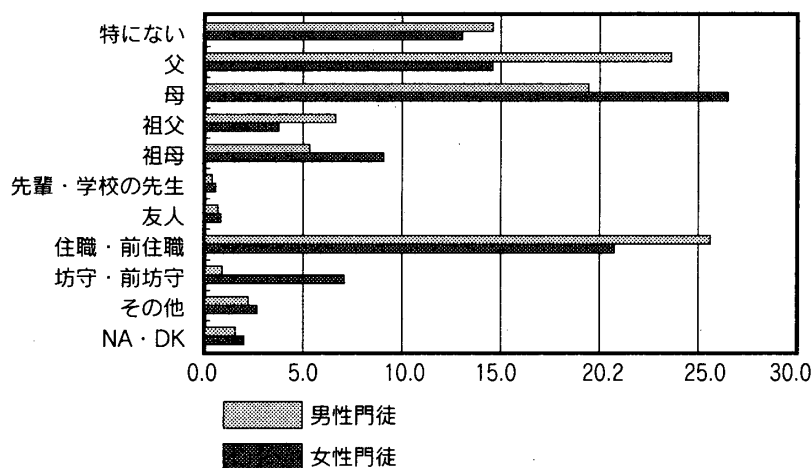


図8. 信仰を深めるうえで影響を受けた人

出典: 第7回宗勢基本調査実施センター編「第7回宗勢基本調査報告」『宗報』, 9月号, 71頁, 1997.

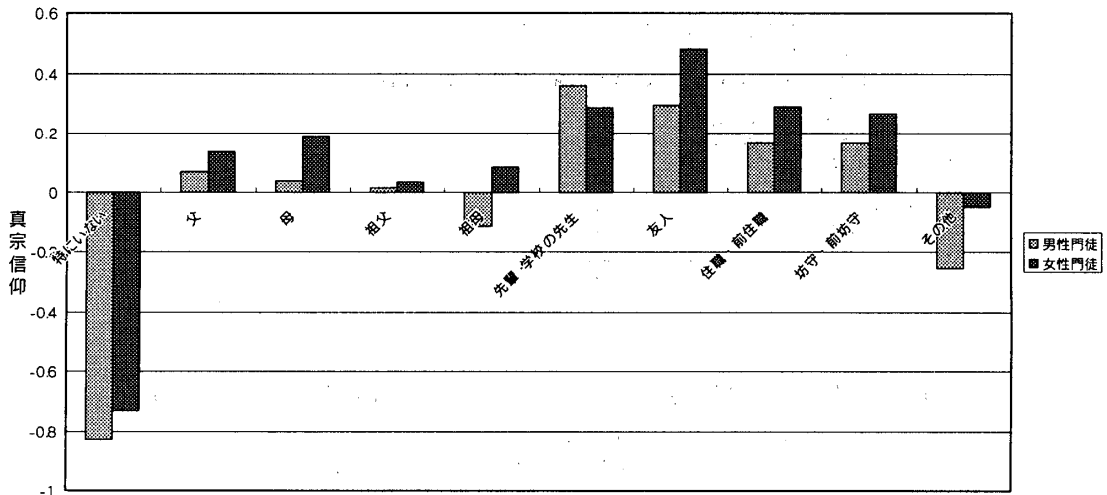


図9. 信仰を深める上で影響を受けた人と宗教意識

一が出来事の意味が不分明なところから「意味の問題」と呼んだきっかけである¹¹⁾。

真宗門徒に信仰に関心をもつに至ったきっかけについて尋ねてみると、それは図6のようなきっかけであった。親の影響によるとするのが圧倒的に多い。次いで家庭の雰囲気である。寺院での活動や身近な者の死、日曜学校の経験や自分の病気や他人の看護、家庭の問題がそれに続き、経済や仕事上の不安や仕事場での人間関係がきっかけになることは非常に少ない。

ところが、これらのきっかけ別に門徒の宗教意識を見てみると(図7参照)、男女間ではかなり違いのあるきっかけも見られるが、意外に親の影響や家庭の雰囲気がきっかけで入信した門徒の宗教意識は〈真宗信仰〉的ではなく、意味の問題がきっかけになった場合や、寺院での活動や日曜学校の経験がきっかけになった場合の方が、宗教意識はより望ましいとなっている。

また信仰を深める上で影響を与えた人を見て(図8参照)、父母や住職、祖父母や坊主の影響が大きい。しかし、この場合も、信仰を深める上で影響を与えた人別に、その影響を受けた門徒の宗教意識を見てみると(図9参照)、〈真宗信仰〉的な意識の醸成度合は、影響を与えた人が先輩・学校の先生、友人、住職、坊主の場合に、男女とも強くみられる。父母や祖父母など親族からの影響では、女性門徒の方が男性よりも望ましい方にあることが知られる。

寺院活動や日曜学校の経験が入信のきっかけになり、住職や坊主の影響が、〈真宗信仰〉的意識の醸成に好影響を与えるとすれば、寺院での活動や住職・坊主の活動と資質は、門徒の宗教意識の醸成に非常に大きな意味を持つように思われる。

(2) 宗教活動と宗教意識

寺院での活動が宗教意識に良い影響を与えるとすれば、宗教活動の盛んな度合が、門徒の宗教意識のレベルと相関することが推測される。そこで、第7回宗勢基本調査までの各寺院の各種の教化団体活動の実施状況を見てみると、それは図10の「教化団体活動率(第1回～第7回調査)」の通りである。

図10を見れば一目瞭然であるが、BS・GS(ボーイスカウト・ガールスカウト)や仏教青年会の実施率は低下傾向にあるが、老人会、若婦人会、日曜学校・子供会、仏教壮年会の実施率は横ばいである。ただ仏教婦人会の活動のみが圧倒的に活発で、実施寺院の年平均活動率も6回、1回当たりの平均参加人員数も44人と多い。

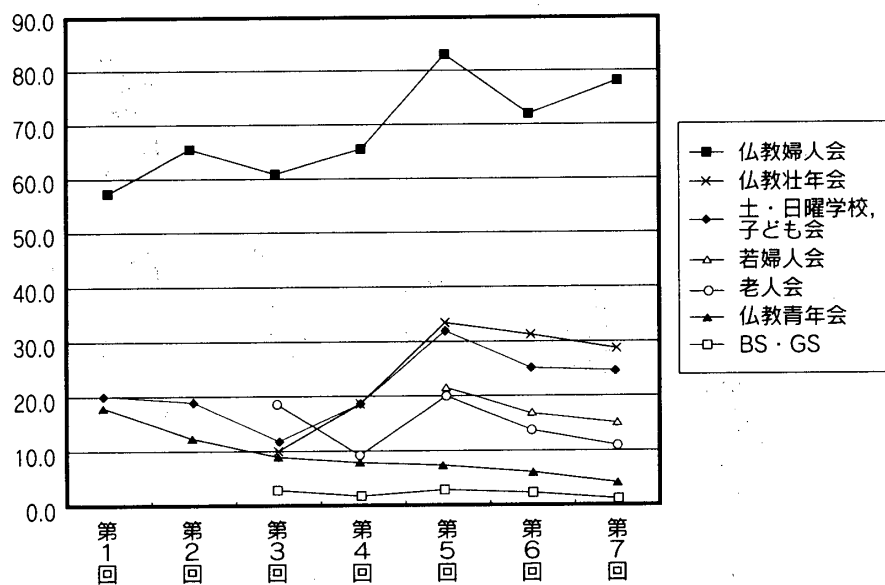


図10. 教化団体の活動率(第1回～第7回調査)

出典：第7回宗勢基本調査実施センター編「第7回宗勢基本調査報告」『宗報』，9月号，49頁，1997。

表2. 宗教意識(私はお寺に行くのが楽しい)

項 目	男性門徒 (%)	女性門徒 (%)
全く賛成	37.1	48.2
やや賛成	36.6	32.1
どちらともいえない	23.1	17.4
やや反対	0.5	0.3
全く反対	0.2	0.2
NA・DK	2.5	1.8
計	100.0	100.0

出典：第7回宗勢基本調査実施センター編「第7回宗勢基本調査報告」『宗報』，9月号，63頁，1997。

このことを反映してか、表2が示すように、男女門徒の〈寺院に行くのが楽しい〉という女性門徒は80.3%で、男性門徒は73.7%である。産業社会学で、職場へ行くのが楽しいという労働者の比率が高いほど、その企業は生産性が高く、活発であると言われているが、宗教団体の場合にも、それが言えるようである。つまり、仏教婦人会の活動が群を抜いて高いことは、女性門徒のそのような意識と相関していると言えよう。

たとえば、仏教婦人会活動への参加度合別宗教意識を見てみると、それは図11のようになる。婦人会活動への参加度合が高ければ高いほど、〈真宗信仰〉的意識の度合も高くなっている。

このことは、他の会合への参加の度合についても言える。図12では、男女門徒ともに、研修会等への参加の比率に相関して、宗教意識のレベルも高くなる。どのような宗教も、礼拝、聴聞、瞑想、座禅などを頻繁にあるいは規則的に行うことを奨励する。それは宗教的意識世界との出会いを勧めるためであるが、この頻度が高まれば高まるほど、宗教的世界の香に染まることになり、門信徒の宗教意識や行動もその香に染まることになる。

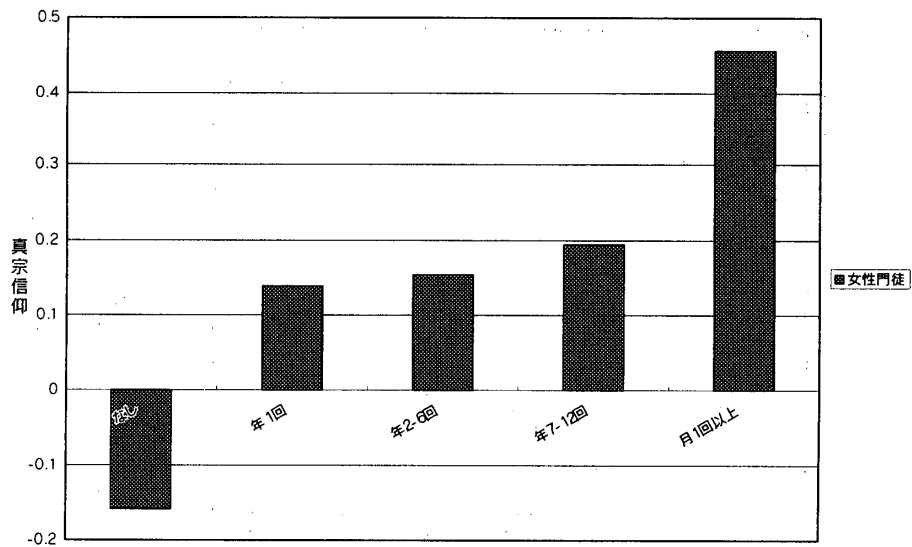


図11. 仏教婦人会活動への参加度合別宗教意識

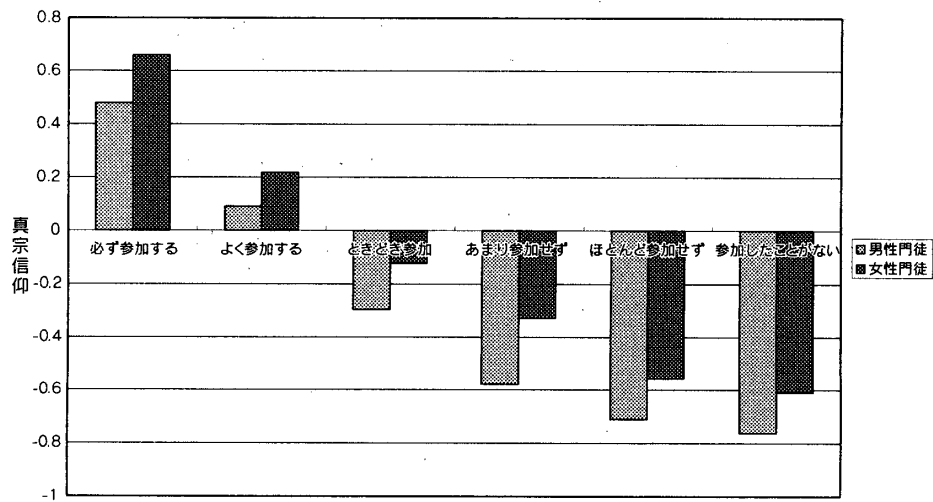


図12. 教区主催等の研修会参加の度合と宗教意識(男性門徒, 女性門徒)

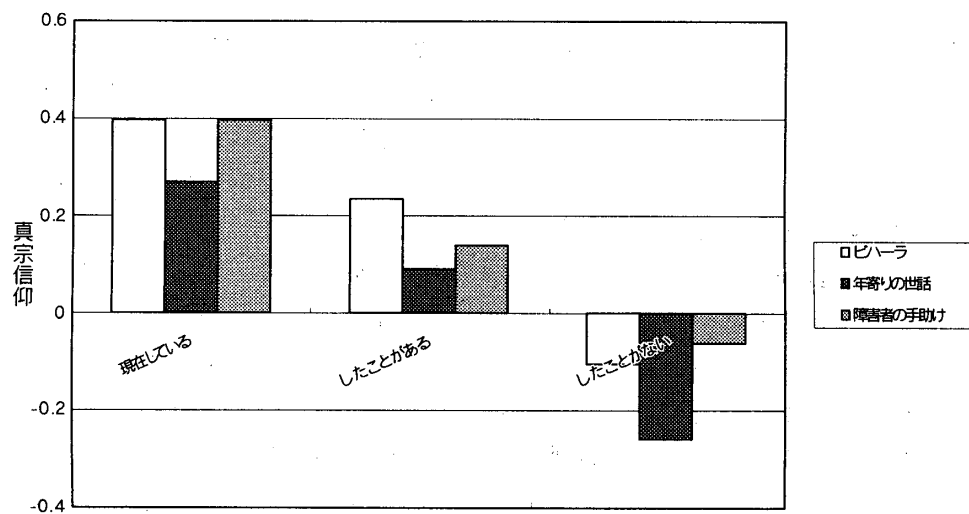


図13. 門徒の福祉的ボランティア活動参加経験の有無と宗教意識

表3. 門徒のボランティア活動

項 目	男性門徒 (%)	女性門徒 (%)
ビハーラ(ホスピス)活動	22.9	28.9
お年寄りの話し相手・介護など	52.6	62.5
障害者の手助けや手話・点訳など	18.6	23.5
子供の課外活動や幼児の世話など	45.4	52.8
地域の美化・環境保全活動など	80.5	76.2
地域の教育・文化活動など	64.2	49.7
町おこし・村おこしの活動	61.5	43.2
災害地での救援・支援活動	43.0	38.9
消費者運動	17.4	29.2
スポーツ・レクリエーション活動	63.0	54.1
リサイクル運動	47.1	56.4
交通安全運動	64.8	50.0
日本にいる外国人の手助け	12.6	9.5
海外での支援活動	8.1	7.7
その他	7.7	8.3

出典：第7回宗勢基本調査実施センター編「第7回宗勢基本調査報告」・「宗報」，9月号，70頁，1997.

しかし、宗教意識は社会的実践に、どのように影響するのであろうか。門徒のボランティア活動の内容を見てみたのが、表3である。調査対象が個々の末寺寺院の役職者が多いため、その参与活動の内容も多様である。それらの内、ビハーラ（ホスピス）活動、お年寄りの世話や介護、身障者の世話や支援活動の三つの福祉的活動に参加している門徒の宗教意識を見たのが、図13である。これらの活動に参加し、または参加したことがある門徒の宗教意識は圧倒的に〈真宗信仰〉的でレベルも高い。逆に参加したことのない者は、非〈真宗信仰〉的意識が強い。ここにも宗教意識と社会的実践（社会の福利厚生や社会改良に寄与するような活動）の相関の密度が高いことが見られる。

4 おわりに

以上、浄土真宗の門信徒の宗教行動と宗教意識の分析から、日本人の宗教意識は無自覚的、年中行事的と言われているが、門徒の場合を分析することによって明確になった点は、自覚的宗教意識のレベルの高い人ほど、社会の福利厚生や改良に貢献するような活動にも積極的に参加しているということである。

これは、浄土真宗の場合には、大乘仏教の利他主義的な菩薩の精神が精神的なモデルとなっているため、それが社会的実践の方向性を示すものとなっているためであると解釈される。これがすべての日本人の仏教徒に通ずるものかどうかについては、今後の一層の研究に待たねばならないが、大乘仏教の利他主義的菩薩の精神が他の仏教徒にもモデルとして受け入れられているとすれば、上記の考察は、日本においてさらに広く一般化されうるのであろう。

かつてある研修会のパネル討論会で、ある女性僧侶が宗教心と倫理的行動の関連性について、「せずにおれないところ」によるものであると説明したことがある¹²⁾。利他主義的菩薩の精神を

こころのモデルに持っているものには、そのような実践は自然に行われることになるというのである¹³⁾。

高度の宗教意識は、高度の社会改良的实践と結びつくことにおいて、筆者には、浄土真宗には社会改良へのモデルが存在するように思える。ベラーの言う「宗教が、究極的価値の本源にかかわり続けるかぎり」、そして人々の宗教意識が内容とその質において高いレベルを保つ限り、日本の宗教、特に仏教は、時代を超えて人々を善導し、日本社会改良のモデルを提供する力を保持しているように思われる。以上の所論から考えれば、彼の言うように現代日本においては社会改良に志向させるような宗教的洞察力が必要であるように思う。この問題の理論的解明については、また他日に期したい。

文献

- 1) 題目の社会的実践とは、社会の福利厚生や社会の改良に資するような行為や活動を指す。
- 2) R. N. ベラー (堀一郎・池田昭訳)『日本の近代化と宗教-日本近世宗教論- (付録: 丸山真男の書評)』未来社, 1962; (池田昭訳)『徳川時代の宗教』岩波文庫, 370頁, 1996。前者の副題は、直訳すれば、「日本の前近代産業社会の諸価値」であるが、後者のペーパーバック版では、新たな『まえがき』が付され、副題も「近代日本の文化ルーツ」に変えられている。
- 3) R・N・ベラー (口羽益生, 舟橋和夫訳)「鎌倉仏教の現代的意味」ロバート・N・ベラー, アルフレッド・ブルーム, 二葉憲香『親鸞を巡るもう一つの文化論』, 51-57頁, 永田文昌堂, 1997。
- 4) NHK放送文化研究所編『現代日本人意識構造』日本放送出版協会, 付録1頁, 2000。
- 5) 同上, 131-133頁。
- 6) NHK世論調査部編『日本人の宗教意識』日本放送出版協会, 3-5頁, 1984。
- 7) 口羽益生 "A comparative study of family consciousness in rural Malaysia, Thailand and Japan, An interim report,"『地域総合研究』(龍谷大学), 第6号, 124頁, 1996。
- 8) NHK世論調査部編, 前掲書, 30-31頁。
- 9) 朝日新聞2003年8月1日掲載記事。
- 10) 第7回宗勢基本調査実施センター「第7回宗勢実態基本調査報告」『宗報』(浄土真宗本願寺派), 9月号, 1997。
- 11) 口羽益生「クリフォード・ギアツの宗教論」『龍谷大学論集』第433号, 63-65頁, 1989。
- 12) その説明とは、2000年8月8日浄土真宗本願寺派聞法会館で開催された「真宗教団連合中央研修会 (第18回教化伝道について)」におけるパネルディスカッション〈「今、真宗に求められているもの～教化伝道を志す方への提言～」〉における見義悦子氏 (真宗大谷派富山教区正覚寺副住職) によるものである。
- 13) 1996年以前のことだと記憶するが、九州大学名誉教授鈴木広氏から、北九州の調査で福祉活動に積極的に参加している人たちは、宗教的にキリスト教徒であると予想していたら、浄土真宗の門徒が多かったのが驚いた。これはどうしてだろうかと質問されたことがある。その時、北九州では「豊前門徒」と呼ばれるくらい篤信な門信徒が豊前に多く、その人達が北九州の開発が進むにつれて移住してきた例が多いと聞いていたが、その事実と関連があるかもしれないとしかお答えができなかった。本論で解明したように、門徒の場合、宗教意識が高ければ、社会的実践の度合いが高くなる傾向があることが見出されたので、この分析内容をもって、当時できなかった鈴木氏へのお答えに代えたい。